2023 年 2 月 22 日
子どもの日本語教育研究会　研究企画委員会　Project-B

活動報告　公開読書会(2)　2022 年 11 月 6 日実施
教育実践にみる「ヴィゴツキーの『思考と言語』」

プロジェクトBの第2回公開研究会では、ヴィゴツキーの言語と思考に関わる諸理論を背景に実施された教育実践に関する次の論文について、報告とコメント・ディスカッションを行いました。

(1)野原 博人，田代 晴子，森本 信也(2019)「子どもにおける科学概念構築を促す対話的な理科授業のデザインとその評価」『理科教育学研究』59 巻 3 号 443-455
(2)山本 良太，鈴木 慶樹(2021)「正課と正課外の学習活動の往還によるキャリア展望の具体化に関する研究」『日本教育工学会研究報告集』2021 巻 4 号 25-32
(3)川田一郎(2014)「言語的思考力を育む国語科の授業の創造」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』第 17 号. 31-41

プロジェクトBのメンバーと一般参加者の皆さんからの感想(図書・文献の解説や分析ではなく、「インスパイア」された「個人の感想」)をご紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

川田(2014)を読んだとき、生活的概念と科学的概念のそれぞれはなんとなく理解できていたのですが、「アプロプリエーション」が今ひとつ明確に理解できていなかったのですが、今回の 3 本の論文をみんなで討論しながら読み進めていくうち、みなさんからのことばによる適切な説明やインプットのおかげで、自分のモヤモヤ感が整理されました。まさしくこれが言葉によるアプロプリエーションなんだなぁと、実感しました。また、正課と正課外の学習活動の連続性(山本 2021)の議論からは「日本語教師養成課程」に関わる際の大きなヒントをもらったような気がします。とても内容の濃い読書会でした。ありがとうございました。(久好)

自分が関わっている子どもの日本語教育現場から考えると「正課と正課外の学習活動」は学校内と学校外(家庭・地域など)を連想してしまいます。確かに学校内でも休み時間や給食の時間など授業時間以外での友達や先生やいろんな人とのやりとりなどもあると思いますが、やはり学校教育の 1 日の時間割の中に組み込まれている教育活動の中でのやりとりだと感じます。この論文で述べられている「正課の学習活動」とは川田論文で出てきた生活的概

念をベースとして科学的思考を学び、その 2 つを融合してさらに高次な学習へと高めていく場（ほとんどの時間を決まったクラスメートや先生たちと過ごす）、「正課外の学習活動」は特に興味関心のあることやこれまで経験したことのないようないろんな体験ができ、普段の毎日の生活では出会えないような人とも出会える場ではないかと考えます。将来こんな仕事をしてみたい、こんな生き方をしてみたいと思えるような人とも出会える場、それはこれからどう生きていくかを自分で選び取る力を養うというキャリア展望にもつながると思います。

取り出し授業では、ほとんどと言っていいほど1対1なので、対話が全て教師対生徒になってしまいます。その子どもたちが別の機会に別の場で集って活動しているのを見たとき、本当に楽しそうに活動していました。まさに「没入」していました。1対1でも教師の言葉がけなど工夫していく点は多々ありますが、子ども間で多くの対話や協働学習ができるように、少しでも環境を整えていくすべはないものかと考えています。（与縄）

今回の3本の論文はそれぞれあまり関係なさそうだったのに、今日のやり取りを通じて、何となく話が絡み合いながら進んでいったことが非常に面白かったです。「科学的概念」をどう捉えるかというのは、それぞれの書き手が何に関心を持ち、何を言いたいかによって、色々な定義がありうるということも感じました。

また、今日の最後の方のやり取りの中で出された「聞く対話」「バウンダリーオブジェクト」「仮説生成模擬授業」といった考え方は多くのヒントを含んでいるように思いました。皆さんがこれらのことばに誘発されて話してくださったご自身の実践の場での経験はとても具体的で示唆的であり、自分自身はこういう場ではあまり発言できず、発言しても何が言いたいのか自分でもわからず落ち込むことが多いのですが、「聞く」ことで多くのことを学んだ気がしています。今回の三つの論文の読書会を通じて、学びの場というのは色々なところにあって、それへの参加の仕方もまた色々であって、そこを柔軟に捉えることを忘れてはいけないと改めて感じました。（小川）

「国語科」「理科」「キャリア展望」という 3 つの論文の異なる観点から、それぞれヴィゴツキー理論について捉えなおすことで、プロジェクト B で読み進めてきた『思考と言語』に書かれていた内容について、これまでよりも理解が深まり、より具体的にイメージすることができました。一方で、その解釈や理解、応用や発展、可能性などの多様性に触れたことで、ヴィゴツキー理論についてまだまだ勉強不足であることを痛感しました。特に、「正課と正課外」の学習活動とキャリア展望のつながりについては、大学生とは異なる発達段階にある子どもの日本語教育の特徴や考えなければならない点について、改めて見直すきっかけとなりました。主に「正課」で学習する「科学的概念」と「正課外」で学習する「生活的概念」という線引きももちろんある一方で、子どもの学校生活を考えてみると、休み時間、給食の時間、掃除の時間、学校行事、宿題などは、内容によってその線引きは難しく、子どもはその状況に応じて「科学

的概念」と「生活的概念」を行き来しており、その往還の中でこそ多くの事柄を学習していると考えます。そのようなことを踏まえ、プロジェクトＢのテーマとなっている「ことばと参加」について検討する際、子どもの日本語教育の実践において発達の最近接領域をどのように活かしていけるのか、活かすべきなのかということを、教師が考えることの重要性を実感しました。（河野）

３本の論文を読む前、タイトルからは共通性を感じなかった。しかし、報告やコメントを聞いているうちに、「対話」という共通性に気づいた。児童生徒の深い概念の獲得、生活的概念と科学的概念の融合につながる対話とはどのようなものか。また、そのための学習環境を教師はどのようにデザインすればいいのか。児童生徒だけの対話で実現できるのか、教師はどのような介入ができるのか。様々な疑問が生まれてきた。今後、現場での実践を通して考え続けていきたい。（大隅）複数言語環境に育つ子どもへの教育実践に携わっているとき、子どもが言語の何を習得したかではなく、子どもの頭の中がどう動いているかを見ている自分に気づくことがよくある。今回の川田論文、野原論文に対しても、実践を行なっている教師らの視点が興味深かった。

野原論文での教師の発話は、子どもたちにいかにして思考活動を促すかという視点から発せられており、（コーディング方法は自分とは違うと感じはしたが）、共感からの他者（他児童）の巻き込みと反駁、そして収束と言葉による表出によってより高次の概念を対話により獲得させていく過程が非常に面白く、共感できた。

川田論文では、「走れ」に出てくる「筆者の表現方法を「科学的概念」として位置付けて物語世界から取り出し」としているが、その科学的概念の捉えは、私が考えているものとは少し違った（批判したいわけではない）。ヴィゴツキーの「科学的概念」は固定的な結果としてモノではなく、動的な言語的思考プロセスそのものだと（現時点では）考えている。そのため、筆者の結果としての「表現方法」を「科学的概念」と呼ぶこと、子どもの作文の表現がより具体的で詳しくなったことを「科学的概念」の流入が起こったとすることに疑問を感じた。対象が4年生なので1回の授業での変容は難しいと思うが、もっと長い時間をかけて止揚が起こったり、子どもがアハ体験を感じたり、思考に質的な変化が生じる場面を期待してしまっていたので事例に物足りなさを感じたのかもしれない。

いずれ、やはり、言語的思考を促すにはミクロレベルでの鍛錬が重要だという思いがまた強くなった。プロ教師（匠）になりたいな。（櫻井）

前回同様に今回の読書会も、会が始まる前までは漠然とした理論の理解に留まっていましたが、読書会での皆さんとの対話を通して、私自身に科学的概念発生の芽生えを感じることができました。まだ、随意的に言語化するまでには至っておりませんが、今回の読書会で感じたことは、授業をデザインすることのおもしろさや教師の役割の可能性の広がりです。今回の

論文では、対話やバウンダリーオブジェクトの重要性が述べられており、そのための実践的な試みがなされていましたが、課題も多くありました。授業で扱う科学的概念を教師は本当に明確に理解しているのか、子ども同士の対話を起こすためにはどのような環境設定をしたらよいのか（Alexander の対話的授業の 5 つの原則も参考になりました）、子どもたちが学校以外の場で獲得している生活的概念を、どのようにしたら授業の中でバウンダリーオブジェクトを起こさせ、科学的概念獲得につなげることができるのかなど、子どもたちの学びを豊かにするために教師である私たちができることや工夫しなければならないことはたくさんあるなあと強く感じました。引き続き、将来教員になる学生達とともに、私自身も実践現場で様々な試みをしたいと思います。ありがとうございました。（高橋）

今回3本の論文を通して感じたことは、子どもの日本語教育において、「ことばの教育」を個別の閉じた言語教育活動に限定せず、他者との対話や協働、学校外の活動への接続を意識したダイナミックな営みとして捉えることの意義でした。それらは、この読書会のテーマである「ことばと参加」の考え方にも繋がり、また、ヴィゴツキー理論が社会構成主義の立場で社会的な交流を通しての発達に着目し、言語学習と思考の発達は密接な関係があるとしていることとも繋がると改めて思いました。そして、自分自身の日々の子どもたちとの学習をデザインするときに、たとえば今回担当した「正課・正課外」の学習の連関を意識した活動を工夫していくこと（活動後のふりかえりの機会をつくり意味付ける声掛けをする等ささいなレベルでも）、学びをトータルに捉えていくことが、こどもの発達を支えていく上でとても大切なのではないかと思いました。論文はひとりで読んでいてもストンと落ちてこない部分が多かったのですが、今回も読書会で背伸びした頭1個分の（2~3 個分の）・・・私の ZPD を押し上げてもらいました。ありがとうございます！（立山）

ディスカッションでの問い「教師一人と多数の学習者」の一斉指導形態では、対話による協働的な学びは成り立たないのか？」、 また「子ども一人と支援者・指導者一人の、一対一で対話は生まれているのか？」、さらには「複数であれば、常に対話になるのか？」という問いについて考えてみた。

子どもの日本語指導をしている学校や地域支援の現場では、殆どの支援者・指導者が「レベルに合せられるから 1 対 1 が良い」という。そこでは、教師・支援者が次に何をすれば良いかを一つ一つ指示し、答えが見つけやすいように問いかけ、子どもが躓かないように親切に丁寧に指導している。その支援・指導通りに行動することで子どもは目前の作業・課題はできる。例えば、穴埋めのワークシート（教科書をやさしく書き換えた）に、教科書から該当する用語を見つけて記入するような活動である。子どもは達成できた喜びがあり安心して学べる。しかし、そこに、子どもにとって自分の力を発揮して探究したり、創造したりして問題解決をする、知的な刺激と楽しみはあるのだろうか。子どもと支援者・指導者との間に会話（口頭での

やりとり）はあるが、主体的に新たな意味を見つけるような対話にはなっていないのではないか。こう考えると、対話の有無を、一斉か少人数グループか、一対一かという授業形態だけで問うことには意味はないということになる。

野原他の論文は、対話的な教授に関し、Alexander（2005）の①集団の相互作用の形態、②教師の発話、③対話的な授業の基準にもとづき、実践した授業の分析を行っている。私がそこから得られた示唆は、子どもは（教師も含む）、図やノート（ワークシート）に記入されるコメント・発話に載せて意味を交わしながら、主体（エージェンシー）として活動を動かし、その展開に参与する過程で科学的概念が形成されていくということであった。改めて、そうしたプロセスが参加なのだろうし、そこでみられる相互作用こそが「対話」なのだと思った。

教育・支援現場では多様な力、経験をもつ学習者に一斉での指導をする場合も、グループで学習活動をさせる場合も、1 対 1 で指導する場合もある。多様な対象に、それぞれの ZPD を意識した対話のある探究型の学びをデザインすることこそが重要なのだろうが、そのためにも、参加者の「『対話的だった』『協働的だった』『学びが深まった』という見取りが教師の独りよがりにならないようにするには、学びをどう評価するかが大事なのでは？」という問いに、学び手の姿から答えを探っていくことが私たちの課題なのだと思う。（齋藤）

とにかく 3 本の論文をということでうんうんうなりながら（？）選んだ 3 本の論文でしたが、一つの共同体の成員となったみなさんが協働的な読みによって論文のつながりを生み出していくというプロセスが目の前の生じているのを心地よく感じました。3 本の論文がそれぞれ「バウンダリー・オブジェクト」になったということでしょうか？

川田論文の「科学的概念」は「本当に概念と呼んでいいのか？」という問題提起がありました。まさしく技能教科である国語科教育の難しいところだと思いますが、反対に「科学的概念」の枠組を拡張しないと、ことばの教育の問題の手がかりにはならないということを示唆してくれているような気もします。「概念」というと、ともすれば「語」とイコールのように捉えられがちですが、「命題」や「論理関係」と呼ばれるものやその生成プロセスまでも含んで、みなさんがおっしゃるようにダイナミックな営みとして捉えるのがよいのではと思いました。

教科学習では、いまの学習指導要領が出る前後、指導要領に謳われた「教科の見方・考え方」についての議論が盛んに行われていたようですが、「教科の見方・考え方」が実は科学的概念なのでは？という気がします。国語科では、教科の見方・考え方が「ことばによる見方・考え方」となっているのですが、素人にはどうもしっくりきません。野原論文の「仮想から上層に向けた「足場づくりのためのアセスメント」による子どもの思考の連続的な引き上げ」のような感じで子どものことばの力を引き上げることを、国語科でも日本語指導でも、現場の先生方はされているように思います。その様子が捉えられたら…（浜田）